

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520499

研究課題名(和文)地形論的統語論と自立分節韻律音韻論にもとづく日本語イントネーションの史的研究

研究課題名(英文) Historical Study on Japanese Intonation Based on Cartographic Syntax and Autosegmental Prosodic Phonology

研究代表者

前田 広幸 (Maeda, Hiroyuki)

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40219275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年の統語理論および音声音韻研究の成果をよくふまえた上で、平家正節に代表される、平曲の語りに関する譜記を有する平家物語諸本を基幹資料とし、日本語イントネーションに関する史的研究をおこなうことを主目的としたものである。その際特に、各要素が情報構造上になう役割の違いに応じた統語論的位置を占め、音韻論的な句のまとまり形成に関し、いかなるふるまいを示していたかを中心に分析をおこなう点に特色がある。その成果は、平成27年度に岩波書店から刊行された共著書の中に反映されている。

研究成果の概要(英文)：In this study I have concentrated on an interaction between an FS(focus structure)-Prosody association (e.g. focus elements tend to be associated with higher pitch than link/tail elements) and an EA(emphatic attitude)-Prosody association (e.g. pejorative expressions tend to be associated with higher pitch than complimentary/neutral expressions), and precisely analyzed the musical note data of The Tale of the Heike, published in the 18th century. The results of this study are reflected in a co-authored book published by Iwanami Shoten in 2016.

研究分野：音韻論

キーワード：イントネーション 平家正節 音調

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年の言語研究の大きな動向として、音声を含む談話の分析の活発化や、音声・音韻、語彙、統語、意味・運用といった諸部門のインタフェース研究の隆盛という大きな流れがあり、そうした動きの中で研究がさかんになりつつある分野の一つに、本研究代表者が近年集中して取り組んできている談話のイントネーション研究がある。ただし主には資料的制約のため、当該分野における研究は現代語を中心に進められてきたのがこれまでの大きな流れである。本研究は、平曲譜本に反映した音調を分析する石川幸子氏による先行研究(石川幸子 1995 等)を記述面での主な出発点としつつ、理論的な言語研究の枠組みの中から特に、自立分節韻律音韻論と地形論的統語論における成果をふまえた検討を加えることにより、日本語イントネーションの史的 연구に 関し、新たな切り口からアプローチしようとするものがある。

(2) 本研究課題に先行する平成 20~22 年度の間、本研究代表者は、科研費による基盤研究(課題番号:20520411)において、先行研究の記述的成果を、最適性理論の枠組みを通して捉え直すことにより、日本語中央語史の中で生じたと考えられる分節-超分節特徴間の相関(すなわち Voiceless-HighPitch v.s. Voiced-LowPitch)について、いわゆる印欧語における Verner の法則や中国語における陰陽分化をはじめ、諸言語で頻繁に観察される、喉頭特徴(laryngeal features)の子音-母音間での拡張を律する制約が、他の諸制約との間でどの時期にどのようにランキング変更を起こした結果と考えられるかを解明するといった、日本語音韻史にかかわる一定の成果をえていた。本研究は、その過程で、今後特に日本語イントネーションにかかわる史的 研究を進展させる上で有効と考えるにいたったアプローチを実践しようとしたものである。

2. 研究の目的

本研究が目指すのは、主に次の 2 つの整理を詳細におこない、それをもとに分析を進めていくことである。

(1) テキスト中の各要素が、情報構造上果たす役割の違いに着目した場合、各種 Topic 要素や各種 Focus 要素が、地形論的接近法(Cartographic Approach)において仮設されるそれぞれの構文論的周辺位置(peripheral position)で音声化されているかどうかと、平曲譜本における具体的施譜によれば各々が音声化に際し卓立を伴っていたと考えられるかどうかとの間で、どのような関係を結んでいるか、整理すること。

(2) 情報構造上果たす役割の違い以外に、音声的卓立の有無に影響を与えらるる諸要因のうち、i) 侮蔑や畏敬の有無といった待遇的/感情的態度の違い、および、ii) 音韻的な句のまとまりのあり方の違いという

大きな 2 つの要因に着目し、それぞれが、情報構造上果たす役割の違いとの間で、いかなる相互作用を示し、音声的卓立の有無に影響を与えていたと考えられるか、整理すること。

3. 研究の方法

本研究の方法にかかわる主な特色としては、次の点があげられる。

(1) 平曲譜本の節博士やフレーズ情報に関するアノテーションに加え、Topic、Focus 要素のマーキングにかかわる係助詞、疑問詞のアノテーションと、待遇態度に關係する一部接尾辞(「~め」「~殿」等)のアノテーションとを行い、R 言語環境を利用したデータマイニングをおこない、上で 2.(1) および 2.(2) としてまとめた点について、統計的なデータ解析過程を経た分析をおこなった点。

(2) 平曲譜本の施譜に反映していると考えられる話線的な音調の動きを、アクセント句、イントネーション句といった各種階層での韻律的フレーズをもとに疎に音調変動点を記述する、Pierrehumbert や Beckman らが推進する自立分節韻律音韻論(Autosegmental-Metrical Phonology)の枠組みを参照しつつ分析し、平曲古譜本においてより疎な施譜の行われている段階から平家正節期にかけて韻律句形成上の変化があったと考えるべきか否か、検討をおこなった点。

(3) 本研究の遂行に際しキーとなったのは、上記(1)(2)の過程を含め、次のような方法論的アプローチを総合的に実施することであった。分析の基礎となる、平家正節譜記データベースへの、係助詞や疑問詞、一部接尾辞といった語彙的要素によるマーキングを手掛かりにした、情報構造論的、待遇/感情態度的役割のアノテーション入力、非正節系譜本の関与部分施譜に関する比較分析、機械可読データベースを利用したデータ解析による仮設の検証、からまでの作業からえられた結果をもとに、地形論的統語論にもとづく統語構造と、自立分節韻律音韻論にもとづく音声表示間で見られる写像關係に 関し、平家正節譜記に反映したあり方とその前の時期の資料に反映したあり方との間で、どのような変化が生じたか生じなかったか、実証と理論の両面から分析すること。

(4) 情報構造関連機能範疇にかかわる地形論的統語階層構造に関しては、Frascarelli & Hinterhölz(2007)にみられる、「ShiftingTopic > ContrastiveTopic > Focus > FamiliarTopic」というハイアラキーをもとに、平家正節譜記データベースをもとに、テキスト中で出現した要素のうち、係助詞、疑問詞、一部接尾辞を含む文節相当単位について、それぞれの要素が、いずれの種類の Topic や Focus 指定部位置をしめるものと解釈できるものか、あるいはそれより高い、

Force にかかわる投射の指定部や、より低い、FiniteP 内の位置を占めるものと解釈されるべきものか、検討をおこなった点。

4. 研究成果

本研究の遂行から得られた主な成果としては次のような点があげられる。

(1) 平家正節において高起式の語の初頭部分で高拍が連続する(HHHH...)ことが期待されるにもかかわらず、LLHH...やLLLH...のような音調変動に対応するかとよめる譜記が施されていることがあり「特殊低起式表記」と称され、音楽的要請により生じるものと解されることが多いが、韻律的句境界とのalignmentのあり方に着目するとアクセント句より大きな句の初頭位置において生じやすいという傾向の存在がうかがわれ、そのような点について、同じHトーン連鎖であっても、自立分節韻律音韻論によれば他の位置と異なる表示をもつことをふまえて理論的解釈をおこない、同時にその前の時期の譜本における譜記のあり方や現代京都語における音声実現のあり方と対照した分析をおこなったことは、意義のあることであった。

(2) イントネーションに影響を与える諸要因のうちの一つとして、情報構造上旧い情報より、新しい情報が卓立しやすいという言語普遍的傾向があるが、情報構造上担う役割の違いをマークする手段として音声的卓立の有無以外の大きなものとしては、係助詞や疑問詞のような語彙的手段によるものと、地形論的接近法がいうところの周辺の統語領域へのovertな移動という統語的手段によるものがあり、両者のかかわりは係り結び(の史的推移)に関する理論的研究の重要な論点となっているところである。音声実現とのかかわりについてみると少なくとも平曲譜本においては、周辺の統語領域へのovertな移動があるかどうかにより、音声的卓立傾向に差が見られるという傾向がうかがわれ、本研究において、各種アノテーション付けを経たデータ解析を通じ、その検証をおこなったことは意義を有するものであった。

(3) 研究最終年度に岩波書店から刊行された共著書には、本研究によりえられた成果を反映させ、次のような内容の記述をおこなった。

生成音韻論の流れの中で Prince & Smolensky(1993/2004)、McCarthy & Prince(1993)等により提唱された最適性理論(Optimality Theory; OTという略称される)や、音声学に基づく音韻論(Phonetically-based Phonology)、調和度文法(Harmonic Grammar)等、最適性理論と比較的にかかわりの強い音韻理論、さらには、コーパス言語学(Corpus Linguistics)のように、生成音韻論の流れとは異質な、統計学的分析手法を用い、音声音韻の史的研究にアプローチする、比較的近年の試みを取りあげ、そのような試みを日本語に関し行う上で

さえられるべき事項のうち、重要と思われる点にふれながら記述した。なお最終節では、具体的文献資料として『平家正節』中の章節をとりあげ、現代語音声の音調に関する、自律分節韻律音韻論の枠組みを用いた分析や、統語・意味・情報構造とプロソディー構造との関わりに関する実験音韻論(Laboratory Phonology)的分析から得られる知見等をふまえると、どのような視野がひらけてくるかをみた。

<引用文献>

- 石川幸子、平曲譜本 イントネーションから解釈へ、国語国文、64巻4号、1995
Frascarelli, M. and R. Hinterhölz(2007) Types of Topics in German and Italian. In S. Winkler and K. Schwabe(eds.) On Information Structure, Meaning and Form, John Benjamins
Prince, A. and P. Smolensky(1993/2004) Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar, RuCCS-TR-2, CU-CS-696-93/Blackwell(深澤はるか訳(2008)『最適性理論 生成文法における制約相互理論』, 岩波書店)
McCarthy, J. and A. Prince(1993) Prosodic Morphology I: Constraint Interaction and Satisfaction, Ms. University of Massachusetts and Rutgers University

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計1件)

- 高山倫明・木部暢子・松森晶子・早田輝洋・前田広幸、岩波書店、シリーズ日本語史 第1巻 音韻史、2016、272
<https://www.iwanami.co.jp/.B00KS/02/5/0281270.html>

〔その他〕(計3件)

教科書類の分担執筆

- 田口紀子(編)、京都大学学術出版会、大学からの外国語 多文化世界を生きるための複言語学習、2015、262
<http://www.kyoto-up.or.jp/book.php?isbn=9784876984930>

事典類の分担執筆

- 日本語学会(編)、東京堂出版、日本語学大辞典、2018 予定
佐藤武義・前田富祺(編集代表)、朝倉書店、日本語大事典、2014、2456
<http://www.asakura.co.jp/books/isbn/978-4-254-51034-8/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

前田 広幸 (MAEDA, Hiroyuki)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：4 0 2 1 9 2 7 5